

七
伏

白秋全集
32

小説

白秋全集 32

第三回配本(第Ⅱ期二五・三七巻・別巻一)

一九八七年三月五日 発行

定価四二〇〇円

著 者 北 原 白 秋

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋一丁目
発行所 鐵 岩 波 書 店

電話 〇三・五五二二
振替東京六二六四〇

落丁本・乱丁本はお取替いたします

葛飾文章

哥路

金魚經

よぼよぼ順礼

秋山小助

影

目次

葛飾文章	一
哥路	三
金魚經	一七
序品	一九
前篇	一九
中篇	二四
後篇	二七
よぼよぼ順礼	三九
秋山小助	四五
影	四九
後記	五五

葛飾文章

〔昭和7年6月10日 アルス刊『白秋全集』第一四卷「小説集」〕

葛飾文章

——童と子鴉と犬と——

1

その頃、既に田園の季節も夏の真盛りに近づきつつあつた。

*

銀泥の背景^{バック}に紫と群青とのあの光琳模様の花菖蒲が、まさに葛飾の五六月を象徴したものとすれば、七月は紅い鳳仙花と清楚な白蓮の花の季節^はに入つてゆく。その水々しい推移の間を、私達夫婦は先づ先づ平安な、而も至極簡素な状態の下にその日その日を見送つて行つた。それは貧しい生活ではあつたが、少くとも私達にはかなりの幸福な日常であつた。殊に新婚当時であつただけに、私達の眼に触れ肌に触れる四辺の風物もまた、絶えず汗ばんだ光沢紙^{アイトペーパー}のやうな光沢と、新鮮な生物の香気と、濡れしづいてゆく様々の顔料の艶めきとで、恰も日にまし豊満な女人の肉体でも見るやうに自然な而も悩ましいほどの素晴らしい発育を続けてゆくのが感じられた。それは潑刺とした、極めてまた肉感的な平原の面趣であつた。

*

私達が喧騒な都会の熱鬧場裡から逃れて、その純朴な田園の中に身を置いた事は、あながち詩人風に我

と我が象牙の塔に立て籠るほどの自尊心があつた訳でもなければ、あながち又、現世を厭ふ仏者の無常觀から発心した訳でもなかつた。無論、今の若さであの隱遁的な閑雲野鶴を極め込まうなどといふ大雅な心には到底成り切れる筈がなかつた。ただ有体に云へば私は疲れ果ててゐたのであつた。永い間の根の無い水草のやうな生活から、暫くでも落ちつきたい、休息したい、さうして心の底からのびのびとした大きな呼吸がつかたいと思ふばかりであつた。それに妻は病身ではあつたし、彼女にもかなりの保養が必要でない事はなかつた。それで私達は極めて質素な蜜月遊ハネムーンのつもりで、当分のところなるべく空氣の澄んだ、塵埃と煤烟との災から少しでも離れた近郊の勝地に仮の壻を定めたのであつた。

*

かうした私達の生活は初めから決して陰湿なものではなかつた。否、寧ろ明る過ぎるほど開放的で、平民的で、また平原の牧歌的であつた。さうして日ならず私達の家庭には胴魔声の百姓達が出入りしたり、泥まぶれの濃滴らし共が騒ぎに来たりしだした。さうなるとお粗末な台所にも撈ぎ立ての野菜物が大きな燃え立つばかりの緑の葉並を翻したり、かと思ふと、まるで生物のやうなトマトが播鉢の傍に転げ廻つてゐたり、梁に吊るしたばかりの大鯰が、棚の上の四角なウキスキイ壘を勢ひよく跳ね飛ばしたりする事も珍しくなかつた。

*

そのうちに黒い鴉の子と乳酪色バタの犬ころとが、私達二人の間に割り込んで来た。さうして愈々それらが、同じ家族の一員として、純真な、而も意味の深い日常を私達と一緒に送ることになつた。

哥路カールとはその犬ころのことである。

ある朝、かなりお洒落な私は、クリーム色のルバシカに露西亜の地主気取で紅い細紐を前結びにし、爽やかな夏帽子に、軽々と新らしい手籠を擁へて、川の向うのIといふ田舎街まで、口笛を吹き吹き、肉類や野菜物の買出しに行くのであつた。

その日はいつにも増して美しい空の色であつた。まるで深い光と潤ひとを持つた女の眼のやうないい空あひであつた。

*

八百屋の店先には紅いトマトや、青と白との太葱、空色のシャツを著た慈姑、緑色のサラダ、胡瓜、甘藍、紫の房の葡萄、それに銀の毛をかぶつた水蜜、藍や黄の南瓜、それらの野菜や果実の新鮮な香氣と色彩とで充ち満ちてゐた。全く張り出した日覆の外側よりも却つて内側の方が明るい位に見えた。

そのセザンヌの静物画の影で、私は初めてあの小さな乳酪^{バタ}いろの生き物に出会^{であ}したのであつた。私は初め、おや、猫兒かなと思つた。

*

小さな乳酪^{バタ}いろの生き物はちよろちよろと動いてゐた。

と、房々と垂れた裾太の尻尾が目についた、思ひきりその付け根の尻から振りきつてゐる……

——可愛いね。狎ころかい。

——いいえ、犬の子。

——何ていふ名。

——ジョン。

ジョンはこの時、下積の木函の角にぶつかりさうになつたので、慌てて横を向いた。

——何て大きな頭だ。

まるで白粉^{ユ、ッ}刷毛^ノの毬のやうだと私は見てゐた。黄色い粉おしろいをいつばいにふりかけたサロメのお化粧の白粉^{ユ、ッ}刷毛^ノだ。

おお、ピアズレー。

*

土間の口には鮮かに蔓と葉のついた舶来種の縞西瓜が転げてゐた。一つは黄色いお尻を出してゐる……
ジョンの莫迦々々しい大頭はまたつると縞西瓜へ沁りかけて、今度は外路へ走り出した。

見てゐると、小さな四つの足を小生意気にも二十にも三十にも見せる位の迅さで、その足ばかりが一心に前へ動いてゐる。まるで足ばかりに電気をかけたやうだ。

その乳酪^{バ、タ}いろの犬ころが強烈な光線の中で、今にも溶ろけさうに、小さな小さな塊になりかける、と、

——ジョン、ジョン。

白胸掛の肥満^{ふとつちよ}女のお内儀^{かみ}さんが飛び出して行つた。

*

ジョンが抱かれて来た。

傍へ寄ると、同じ乳酪^{バ、タ}いろの垂れ耳の一つがチラと淡紅^{とんき}いろの裏側を見せた。と思ふと、青い伶俐さう

な眼がそつと此方を覗いた。

綺麗な眼、瑠璃いろの草の実。

*

——可愛いいぢやないかね。

——ねえ、旦那は犬がお好き。

——好きだとも、大好きさ。

——ではお持ちなさいましな。

あまりに無造作に出られたので、此方が吃驚したが、訊けばこの小犬は日の菖蒲見に行つた帰りに拾つて来たのだと云つた。誰かと云へばこの裏の鼻の大きな芸妓さんかと云ふ。そして、実は私が好きで貰つて来たのですけれど、亭主が厭がりますから、可愛がつて下さるなら差上げてもよござんすと云ふ。

生れて間もない小犬はもうその時から厄介がられてゐたのだ。

*

抱いて見ると、香りの深い、温かな、不思議な或る重みが私の両腕を、いや私の靈魂たましひをふはりと圧へつけた。それは軽いやうで、如何にもデリケートに感じられて、実は恐ろしい或る底力を感じさせる。それは全く私以外の或る一つの靈魂の重みだつた。

この深い内部からの重い微妙な身動きはどうだ。何といふまたあどけない美德と邪毒とだ。さう思ふと、何かもう私は妖しい魔法にかけられてゐるのでないか、何かもうこの小犬がある畜類に特殊の靈感と魅力とを、私の靈魂にふりかけはじめたのではないかとさへ思はれた。

抱いてゐながら、私はまたかう思つた。いやいやさうではない。この小犬それ自身が魔法を使ふのでなく、却つてその魔法にかけられたフェアリ・テールスの小さな銀の冠の王女ではないか。

かと思ふと、地面に思ひ切り叩きつけてやりたいやうな、激しい憎悪が胸をついたり、血みどろに蹴りちらしたいやうな変態な性的快感をさへ、私は感じてゐたのであつた。

私はふいとこの手の中の小犬をひつくらかへして見た。

縮めた兩つの後肢の間に、一つの小つちやな、白の毬花のやうなのがチョツボリついてゐた。

——雌めすかな。

——ええ、寝小便して困りますよ。

八百屋のお内儀かみはせつせと、私の蔓のついた手籠にしこたま野菜物を押し込んでゐた。

*

十分のち、私はすでに俤上の人であつた。膝には手籠の葡萄や、葱や泥まみれの馬鈴薯や肉や紅いトマトや、それにアスパラガスの缶詰やが、みんなぶんぶんしたい薫りであつた。それに小犬も一緒にかき載せて、すっかり私はいい氣持になつてゐた。

帰る途々も、私は空を仰いだり、広々とした青田続きを見渡したり、みそ萩の咲いて鶏の啼いてゐる農家の庭を差覗いたり、思はぬ麦ほりに咽せたり、遠くの犬の声などに耳傾けたりした。

不思議にまた、この小犬を抱いてゐると思ふと、何もかもが清新に見え、耀いて見え、意味ふかく聴きなされた。

中にも犬の声には格別神経がピリリとした。

*

それは明治初年頃の青い硝子画のやうな風景であつた。その空に白い雲が見え、一本の枝垂柳が見え、その下に涼しい野川の木橋や、鄙びた草葺の一軒家やなどが青い青い田圃の中に現はれて来た。その家が私達の所謂葛飾草舎であつた。いや、その離れの二た間だけがさうであつた。

母屋には型ばかり田舎向きの雑貨が並べてあつて、赤ら顔の肥つた四十五六のお内儀が、いつも長火鉢の前から通りがかりの百姓達と快活に声高に挨拶したりしてゐる。さうした家であつた。

外庭の井筒のそばには壊れかけの粗末な竹棚があつて、まだ初夏の頃は、そのかげに紫の菖蒲などが咲いてゐたが、今は一重の鳳仙花がちらちらし出してゐた。

その前で私が俥から降りた時、母屋には不思議にも誰一人居なかつた。ただ大きな白猫だけが、透き徹つたラムネ瓶の前に尾を巻いて、ひつそりと坐つたきり、そのびくびく動いてゐる尻毛の尖ばかり狙つてゐた。と。

——かあ、……………かあかあ。

鴉の聲が二た声三声家の裏でした。

もう、お午だ。

子鴉は大喜びで私を迎へた。びよこびよここと庭の射干ひあざの陰から跳ね跳ねして出て来た。その時私は小犬を抱いて横手の小門から恰度入りかけてゐた私自身を見出した。

鴉を見つけると、私は思はず赤くなつた。小犬を手に入れた嬉しさから、私はすっかりその子鴉のことを忘れてゐたのである。私はその日に限つて、ビスケットのひと袋を鴉の為に買つて来ることを忘れてゐ

た。

私の足元に來て、子鴉はまたかあと啼いた。円い頭を傾げて、可愛い緑の眼玉を耀かした。

私は手籠を野菜ごと縁側に投げ出してから、小犬を擁へた儘、鴉の前に蹲踞しゃがみむと、一寸片手を伸べた。

——寂しかったかい、おい。

子鴉は私の掌の下でまた嬉しさうに翼をばたばたさした。さうしてまた首を突込むと私の白靴の尖を啄きに來た。

その時、強い真夏の光線は、頭の上の泰山木の葉を透して、私の新らしい麦稈帽子とルバシカと鴉と、犬とに照りそそいだ。そこら一面がまたしんとした緑色の反射光で澄み亘つて來る。ただその中に、私の日に焼けた手首だけが、思はぬ紅色に光つて、ただ一つ生き生きと鴉の青い翼の上で動いてゐた。

ふつと犬ころが身動きした。と感ずると、私はまた思ひ出した。子鴉にかまけて今度はまた連れて歸つた犬ころの事を忘れてゐたのだ。

小犬はうとうとといい氣持に眠りかけてゐた。それを抱き起すと、両手でいきなり前肢を開いて、立てた膝の上からひよいと鴉の目の前に突きつけて見た、どうだい、いいお友達を連れて來たらう。さう心の中で微笑した。

——かあよ、ほうれ。

——ぎやあ。

私が吃驚するほど鴉は驚いて飛び退つた。そして、頭を三角にすると、キツと身構へした。その両つの眼の光。それは驚きと恐れとで一時にぎらぎらした。而もこの見馴れぬ意外の闖入者に対する、子鴉の態

度にはまた既に十分の敵意をも示してゐた。

鴉の太い嘴は、この時その身体と直角になつた。

——ぎやあ。

——ひゅんひゅん。

小犬は慄へて頭の白粉^ユ刷毛^ヅを振り動かした。思ひきりお凸で鼻低の、その顔を反つくりかへるほど前後左右に捻ぢ向けようとする、前肢と後肢と、身体全体が一緒に恐れと驚きとでわなわな縮み上る。それがまた私にびしびし来る。

だが、まだ小犬の靈魂には他の生物に対して頑固な敵意や憎惡を持つほどの自覚はついてなかつた。まだまだ無邪気なものであつた。

鴉の敵意は今や真つ黒い憤怒に急変しつつある。私はしつと強い眼で鴉を睨むと、

——お、お、可哀さうによしよし。

顫へる小犬を抱き直すと、彼女は矢庭に私の胸にしがみついた。

鴉はと見ると、一寸私が下を向いた間に、何思つたか、縁側にぱつと飛び上つた、かと思ふと、素速く、手籠の傍に跳ねて行つて、その中から真赤なトマトの一つを啄きころがした。自棄くそれに、それをまた啄き散らした。

犬と鴉との初対面はかういふ風で、失敗に畢つた。そこには何らの情愛も相憐もなかつた、その時まで
は。

粗々しい、純真な子供の生活、私はそれをその村に来てから識つた。深く識るとともに驚喜した。罪深い大人の私までが昔に還つた。全く童の心は玉のやうに見えた。

地蜂、彼等は全く地の中から湧いて出た赤蜂によく似てゐた。さうして時とすると地面に火がついたやうにぶんぶん騒ぎ廻つた。

だが彼等は自由であつた、無心であつた。奔放で、粗雑で而も全然感覚的で、活潑で、単純で、善も悪も無かつた。彼等は彼等の欲する儘であつた。美も醜も無かつた。凡てが新鮮そのものであつた。眞実はかりであつた。

慾望即行為、そこに何等の思慮も弁別も知らなかつた。

彼等は食ふ時も遊ぶ時も懸命であつた。

全く一心不乱な彼等と遊んでゐると、混濁した私の頭脳までが澄み亘つて、周りから大きな円光までが立つかと思へた。無論子供の頭からも小さな青や赤や黄や緑の円光が盛んに燃えあがつて見えた。

近世科学の示すところに拠れば燕麦さへもが背光を持つてゐるといふ。この子供の円光を疑ふものは眞に大地の下に遊び恍れてゐる無邪気な子供の頭を見たがよい。彼等がその遊戲の三昧に入つた時、観る人には彼等子供の姿は見えないで、また、ただ遊び恍れた人間の「生」そのものだけが目に映るだらう。殊にもろこしの葉はびかびかする。雀は全身光の羽ばたきになつて引つくりかへる。さういふ原始的な曼陀羅図の中に彼等は遊んでゐるのだ。